

【代表研究者】

福間 良明

京都大学大学院 人間・環境学研究科

【研究題目】

「辺境」による「日本」の表象とナショナリティの融解

【研究の目的】

これまでの日本のナショナリティに関する研究では、ナショナリティが社会的に構築された相対的なものであることを明らかにし、そのうえで、ナショナリティを揺るがし、脱構築する可能性が論じられてきた。しかし、ナショナリティの構築とゆらぎは必ずしも対義的なものではなく、ときに双方が絡まりあいながら、新たなナショナリティが再生産されることがあるのではないだろうか。そのような問題意識のもと、本研究では、「地方」「アイヌ」「東亜」といった「辺境」を語った知の言説を分析対象にしながらか、「辺境」との対照で表象される「日本」の像の変容に着目し、そのうえで、ナショナリティのゆらぎと構築の相補的な関係性を考察している。従来の日本のナショナル・アイデンティティに関する研究では、「日本」の自己像は「西洋」との対比で捉えられ、「辺境」は「包摂の対象（とされてきたもの）」とされてきたが、本研究は、その認識枠組みを逆転させ、「辺境」との対照で描かれる「日本」に着目したものである。

【研究の内容・方法】

本研究の内容は大きく、(1)「日本」の均質性/不均質性、(2) <境界>における包摂/排除、(3) ナショナリティの越境/再構成で構成されている。それらの概要は以下の通りである。

(1) 「日本」の均質性/不均質性

まず、近代以降の「均質な日本」の語りの諸相や変化を検証すべく、近代以降の国語学、方言学、ラフカディオ・ハーン研究の言説を分析している。「地方」という「辺境」との対照で「日本」が語られるなかで、「日本」の均質性は予定調和的に紡がれるものではなく、逆に、ナショナリティに回収し得ない不均質性や齟齬が浮き彫りにされ、とくに 1920 年代後半以降、そのことが明瞭に意識されていた。だが、同時に、その不均質性は、通時性や共時性が付与されるなどして、新たな均質なナショナリティが立ち上げられる根拠ともされた。そうしたナショナリティの均質性と不均質性の相補的な絡まりあいを、ここでは明らかにしている。

(2) <境界>における包摂/排除

次に、「均質な日本」を規定するうえでの境界設定におけるポリティクスを照射すべく、「アイヌ」や「沖縄」等を論じた近代以降の人類学、アイヌ学、沖縄学の言説を取り上げている。近代初期においては、「日本」は「アイヌ」をはじめ幾多の異民族が混合・化合して生成されたものとされ、「日本」と「辺境」の境界は不分明なものとされた。もっとも、同時にそこでは、「異質な民族が交じり合うことで生物学的に進化した日本」(= 「西洋」に近い「日本」) と「単一の純粋な民族として未発達のみである辺境」とのヒエラルヒーが想定されていた。しかし、1920 年頃より、「日本」の固有性、「辺境」との混交す可能な差異が語られるようになり、そのなかで「アイヌ」は排除の対象とされ、「沖縄」は包摂の対象とされた。それは、「日本」が「五大国」の一員とされた時期にあって、「西洋」に自己主張し得るだけの特殊性を表象するものであった。そうした「日本」の境界設定における排除と包摂の入り組んだ構造を、ここでは提示している。

(3) ナショナリティの越境/再構成：

そして、最後に、「日本」がナショナルな境界を越境する過程で生み出された国語政策論、民族社会学・宣伝学、地政学の議論を取り上げ、「日本」が均質性を伴ったその枠を超えるなかで生起するナショナリティの矛盾と、その再構成について考察している。大陸への侵出が本格化し、とくに「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」が構想されるようになると、「日本」の均質性や境界設定は変容が迫られた。必然的に、国語政策論、民族社会学・宣伝学、地政学などの学問言説では、固定的・国粹的なナショナリティの根拠が掘り崩され、それに固執することが否認されていった。だが、それらは同時に、「日本」の枠を超えた新たな民族の動的な生成を主張しつつ、「日本」を頂点とした静的なヒエラルヒーを構築し、自らに「西洋」に対置・対抗し得るだけの「普遍性」を付与しようとするものでもあった。そうしたナショナリティの越境に伴う矛盾と再構築の相関関係をここでは検証している。

【結論・考察】

以上の(1)から(3)の考察を通して導かれる結論は、以下の通りである。すなわち、「辺境」は必ずしも「日本」との差異が明瞭に設定されていたわけではなく、ときに両者の類似性も強調された。そのような「辺境」に向き合うなかで、「日本」と「辺境」の類似と差異はさまざまに論じられ、固定的で均質な「日本」を想定するなかで、矛盾や齟齬が生起してきた。しかし、その矛盾や齟齬は逆に「日本」が「辺境」を包括したり、そこに位階構造を設定したりするための根拠へと変換され、そこから新たなナショナリティが再生産された。そして、そのように「辺境」を流用することで新たなナショナリティが生産されることを規定してきたのは、往々にして、脅威/規範としての「西洋」の存在、そのような「西洋」に敵愾心を抱きつつも、何らかの形でその模倣を志向する心性であった。

このように、本論文は、「辺境に映るナショナリティ」に着目することで、ナショナリティの予定調和的な構築過程をのみを注視するのではなく、かといって、ポストモダン論のように「ナショナリティのゆらぎ」を過度に称揚するのではなく、「ゆらぎ」がナショナリティを再生産する危機を批判的に提示している。それは、「ナショナリティの構築」と「ナショナリティのゆらぎ/脱構築」を二頁対立的に捉える枠組みでは不可視化されるものを浮き上がらせる試みでもある。